The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「鉄のカーテン」を越えて : スコーネの「国替え」を巡るデンマークとスウェーデンの研究史
Author(s)	古谷, 大輔
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2019, 23, p. 297-308
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71789
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「鉄のカーテン」を越えて
ースコーネの「国替え」を巡るデンマークとスウェーデンの研究史[1]ー

古谷 大輔

はじめに

近年の日本の歴史学界において，近世ヨーロッパの実態に即した政治秩序として「礫岩のような国家 conglomerate state」への関心が高まっている．「礫岩のような国家」は，近代以降に成立した国民国家のように君主主権の及ぶ領域性や住民の文化的同質性などを基準に形成されたものではないため，長らく歴史学界に共有されてきた方法論的ナショナリズムによっては把握することができなかった政治秩序である．

「礫岩のような国家」は，ケーニヒスバーガ Helmut Georg Koenigsberger（1918-2014）の「複合国家 composite state」論やエリオット John Huxtable Elliott（1930-）の「複合君主政 composite monarchy」論などの先行した議論を踏まえながら，ルンド大学歴史学教授のグスタフソン Harald Gustafsson（1953-）が提唱した議論である[2]. 彼の議論は様々な地域社会が複合する君主政の姿を論じながらも，君主と交渉する能動的な住民の姿から君主政が変動する局面まで論じられている点で特徴的である．我々がこうした彼の議論を適切に理解するには，複合君主政に関する欧米諸国の学界動向を理解すると同時に，方法論的ナショナリズムの観点では抽出することが難しい「礫岩のような国家」が見出された素地として, グスタフソンが変動する君主政の典型例として紹介したスコーネの「国替え」を巡るデンマークとスウェーデンでの独特な研究動向を把握する必要があろう．

本稿はこのような問題関心に従って，方法論的ナショナリズムが普及して以来の「国替え」を巡る両国の研究動向を紹介したうえで，両国の歴史学界で焦点と

---

[1] 本稿は övergång/overgang を「国替え」と訳している．この訳については，『歴史学研究』の誌面上で杉山清彦氏から「(国替えは）ふつう上位権力による転封をいい，また「国替え」させられる側が移動する含意があるので，誤解を招く表現であろう」との批判を頂いている．本稿でも紹介するようにスウェーデン君主政におけるスコーネの位置づけはスウェーデン君主とスコーネ住民との交渉と合意によって決定されたものだが，デンマーク君主政からスウェーデン君主政へのスコーネの転属を決定した 1658 年のロスキレ条約の締結自体は，君主高権の所掌事項として上位権力者により決定された点に鑑み，引き続き本稿でも「国替え」と訳している．cf. 杉山清彦，「2018 年度歴史学研究会大会報告批判」，『歴史学研究』，978 号，2018 年，54-57 頁.

[2] 三者の代表的論考については，古谷大輔・近藤和彦編，『礫岩のようなヨーロッパ』，山川出版社，2016 年に所収された邦訳（H. G. ケーニヒスバーガ，後藤はる美訳，「複合国家・代表議会・アメリカ革命」； J. H. エリオット，内村俊太訳，「複合君主政のヨーロッパ」；H. グスタフソン，古谷大輔訳，「礫岩のような国家」）を参照せよ.

されてきた歴史的な問題を整理し，グスタフソンの議論に触発されながらデンマークとスウェーデンの歴史学者たちが協働して切り開いた今日の「国替え」論の特徴を明らかにするものである．

1. 方法論的ナショナリズムによるスコーネの「国替え」論

学術的な観点に立ったスコーネの「国替え」に関する研究の嚆矢が，デンマークの歴史学者ファブリシュース Knud Fabricius（1875-1967）による『デンマークからスウェーデンへのスコーネの国替え Skaanes Overgang fra Danmark til Sverige』であったことは，今日でも衆目の一致するところである．彼がコペンハーゲン大学で博士号を取得した 1906 年から刊行が開始された『国替え』は彼のライフワークとなり，コペンハーゲン大学歴史学教授の職を辞した後の 1956 年に全 4 巻で完成された．

半世紀に及んだ『国替え』研究の意図は，デンマークが辿った 20 世紀前半の歴史を背景に前半と後半で異なっている．第 1 巻が刊行された 20 世紀初頭においてファブリシュースの意図は，1864 年のデンマーク戦争の結果，デンマーク君主政を構成していたスレースヴィとホルステーンがドイツに割譲された南ユランの問題に触発されていた[3]．南ユラン問題は，デンマーク・ドイツ間の国境線画定に関する住民投票の結果を受けた北スレースヴィのデンマーク復帰といった 1920 年の情勢を頂点に，20 世紀前半のデンマーク国民国家にとって重大な関心事だった．ファブリシュースは，同時代のデンマークにおいて国民主義の「復活」を意識させるためのもうひとつの素材としてスコーネの「国替え」を論じることに同時代的な意義を発見した．

ファブリシュースの前半生の研究は，国民国家のような近代につくられた観点を近世に遡及適用しながら，今日的な課題の淵源を辿る点に特徴があった．『国替え』研究においても，スコーネの「国替え」プロセスを論じるにあたって，ロスキレ条約の影響がデンマークとスウェーデンの二項対立を前提に論じられている．彼は，スコーネの「国替え」という問題からデンマークとスウェーデンがふたつの相容れない国民的個性をもつことを立証しようとしていた．

デンマーク国民主義の側に立ったファブリシュースの『国替え』研究に対する反論は，スウェーデン国民主義の側に立った歴史学者から提起されていった．その代表格にあたるルンド大学歴史学教授を務めたロセーン Jerker Rosén（1909-1976）や軍事文書館のアーキビストとして知られたオーバリ Alf Åberg（1916-2011）らは，ファブリシュースの『国替え』研究がデンマークを過度に意識した点で内容に偏りがあることを批判しつつ，ロスキレ条約以降のスコーネの「国替

[3] K. Fabricius, *Skaanes Overgang fra Danmark til Sverige,* del. 1, Lund/København, 1906.

え」をスウェーデン国民国家の歴史的形成プロセスにおいて注目すべき事例として捉えた[4]．彼らによれば，1658 年のロスキレ条約以降，スウェーデン君主政にとっての至上の命題は，スコーネを統合してスウェーデンとの同質化を実現することにあったとされた．1660 年にカール 10 世グスタヴが崩御した後の摂政団政府においてその目標は一時的に中断されたが，スコーネ住民の抵抗がみられたスコーネ戦争（1675－79）を転機として 1680 年代にスウェーデンへのスコーネの統合が達成されたといった見解は，今日のウーレスンド地域で展開されている新たな研究の潮流が到来するまで，スウェーデン国民国家の「物語」として広く人口に膾炙していた．

同じスコーネの「国替え」という歴史的事象から 20 世紀のデンマーク，スウェーデン双方の歴史学者がどのような問題を抽出しようとしていたのかについては，スコーネ戦争時にスコーネ住民がスウェーデン軍に対抗すべく展開した「義兵 snapphanar」闘争への解釈の差を例にコントラストを描くことができるだろう[5]．例えば，ファブリシュースの研究は「義兵」をスウェーデン人に対するデンマーク人の抵抗の表明として扱っており，そこにはデンマーク国民国家とスウェーデン国民国家の二項対立を前提とした彼のスコーネ理解が端的に反映されている．一方で，例えばオーバリは，「義兵」をスウェーデンの統合圧力に対するスコーネ住民の抵抗の姿として扱っており，集権化や同質化を特徴とする国民国家の統合プロセスに対する彼の高い関心が現れている．

しかしながら，デンマークとスウェーデンの個性の違いに力点を置こうとも，あるいはスウェーデン国民国家の統合プロセスに力点を置こうとも，両者の解釈は 1658 年以降の「国替え」で起きた最も重要な変化はスコーネの「スウェーデン化 försvenskning」である点で見解の一致を見ている[6]．スコーネの「国替え」から 20 世紀に論陣をはった歴史学者が見出した問題は国民国家の実現という現実的な課題に直結する問題であり，その議論は近代ナショナリズムが作り上げた観点を近世に遡及適用する方法論的ナショナリズムの枠内にあった．つまり，デンマークとスウェーデンそれぞれの歴史学者にとって，スコーネの「国替え」とはスコーネの「スウェーデン化」を論じることに他ならなかった．

このようなスコーネの「国替え」研究の歴史を振り返れば，20 世紀という時代情況から与えられた課題に対して，デンマークとスウェーデンの歴史学者が方法

---

[4] 例えば，J. Rosén, *Hur Skåne blev svenskt*, Lund. 1943; A. Åberg, *När Skåne blev svenskt*, Stockholm, 1958.

[5] 「義兵」闘争については，古谷大輔，「バルト海帝国とスコーネの「スウェーデン化」」，『IDUN』，vol.15, 2003 を参照せよ．

[6] Fabricius, *op.cit.*, del. 3, København, 1952; J. Rosén, *Skånska privilegie- och reduktionsfrågor 1658-1686*, Lund, 1944; Åberg, *När Skåne blev svenskt.*

論的ナショナリズムを援用しながら，合目的的に議論を展開してきた特徴を見て取ることができるだろう．その姿は半世紀に及んだファブリシュースの『国替え』研究の意図からも明らかである．彼の前半生におけるスコーネ研究が南ユラン問題に触発されたものだったことはすでに指摘したが，彼の後半生の研究は東西冷戦の渦中でヨーロッパを分断した「鉄のカーテン」に対する問題関心から進められた．1956 年に刊行された『国替え』の第 4 巻では，「鉄のカーテン」の比較対象として，スコーネの「国替え」以後にデンマークとスウェーデンの間に引かれた境界の問題が扱われている[7]．彼自身は，スコーネを新たに統合したスウェーデン君主政による越境禁止の政策を例に挙げつつも，冷戦期の「鉄のカーテン」とのアナロジーで境界を語るに止まり，17 世紀後半における境界の実態を明らかにするまでは至らなかった．

史学史の観点に立てば，ファブリシュースによる「鉄のカーテン」のアナロジーは，デンマーク，スウェーデン双方の歴史学界における「国替え」への関心の分断を象徴する喩えにも見える．方法論的ナショナリズムが作り上げた「鉄のカーテン」を越えて，スコーネの「国替え」の実態が議論されるようになるのは，1989 年の冷戦終結に伴う「鉄のカーテン」そのものの崩壊によって地域間統合への機運が促進され，スコーネ問題がデンマークとスウェーデンの境界を越えたウーレスンド地域に生きる者の間で共有されてからのこととなる．

2. スコーネの「国替え」を巡る視座の転換 —「礫岩のような国家」論 —

ウーレスンド地域という新たな意識の醸成を背景としながら，1990 年代後半以降，スコーネの「国替え」の実態を明らかにする研究が相次ぐようになった．その研究のほとんどは，20 世紀の歴史学者たちが「スウェーデン化」と称したような「国替え」の解釈は方法論的ナショナリズムの産物であるとの批判から出発している．この新たな研究潮流を牽引してきたグスタフソンも，スウェーデン国民国家の発展プロセスへの関心からスコーネの「国替え」を論じたロセーンの諸説に疑問を呈することから出発し，1998 年までに「礫岩のような国家」論が整理された[8]．彼によれば，近世ヨーロッパに実現された国家は，国民国家のように領域性を前提に統一され，その内部において政治的・文化的な同質性が保たれた国家ではなく，それぞれに異なる個性をもった地域が寄り集まることで構成された「礫岩のような国家」であると論じられている．

「礫岩のような国家」の姿は，スコーネの「国替え」が行われた後のスウェーデン

---

[7] Fabricius, *op.cit.*, del. 4, København, 1958.

[8] H. Gustafsson, “The conglomerate state: a perspective on state formation in early modern Europe”, *Scandinavian Journal of History*, vol.23, 1998.

君主政に典型的である．1658 年に締結されたロスキレ条約の内容は，デンマーク君主政を構成していたスコーネ，ハッランド，ブレーキンゲの諸地域がスウェーデン君主に譲渡されたことに止まらない．ロスキレ条約の重要な帰結は，これらの地域がスウェーデン君主政の基本法に反しない限り，これらの地域に独自の法と権利を維持することが認められていた点にあった．そうした独自の法と権利は，デンマーク君主から従来認められていたものであり，スウェーデン王国の法や権利とは内実が異なる．従って，これらの地域がスウェーデン君主政に「国替え」されたとしても，政治的に見ればこれらの地域は統合されないまま，スウェーデン君主政を構成する諸地域になったという訳である．加えて，「国替え」を決定したロスキレ条約は君主高権の所掌としてデンマーク君主とスウェーデン君主との間で締結されたものに過ぎず，スコーネ住民から合意を得た内容ではなかった．条約で定められた法と権利の具体的な内容については，条約締結後にスウェーデン君主と地域の代表者との間で交渉が繰り返され，独自の法をもつ地域政体としてスコーネ公領の設置を定めた 1662 年のマルメー協定により合意をみた．

「スウェーデン化」の議論から見れば，ロスキレ条約からマルメー協定に至る交渉の事実は，スウェーデン君主政による統合の意図に反する事例となってしまう．上述のロセーンの研究でもこれら交渉の事実は紹介されていたが，彼は未成年のまま登位したカール 11 世の指導力が発揮されていなかった時期の例外事項として解釈していた．しかしながらグスタフソンは，17 世紀のヨーロッパでは様々に異なる法や権利をもつ地域政体が特定の君主の下に寄り集まる「礫岩のような国家」が一般的なのであって，スコーネ住民との交渉やその結果としてスウェーデン君主政を構成する地域政体として合意されたスコーネ公領の姿こそが，同時代の「礫岩のような国家」の姿に鑑みれば典型的事例であると指摘した．

確かに，スコーネ戦争後の 1680 年にカール 11 世がスウェーデン君主政に絶対的な君主主権を導入し，1681-83 年にスウェーデン君主政の中核に位置したスウェーデン王国の法がスコーネに随時導入された結果，スコーネはスウェーデン王国に統合された．しかしながらスウェーデン君主政は，1658 年のロスキレ条約以降，スコーネ統合の意図を一貫して維持していたのではなく，統合は一部の住民が「義兵」闘争のような異議申し立てを行ったスコーネ戦争のような情況の変化によって生み出された結果である．2000 年代以降に刊行された概説では，1658 年から 1680 年代にかけてスウェーデン君主とスコーネ住民との交渉によって独自の法と権利をもつ地域政体を育んだ「スコーネ化 förskånskning」のプロセスを経た後，スコーネ戦争による情況の変化を経てスウェーデン王国との統合が図られたと語られるようになっている[9]．

---

[9] 例えば，N. E. Villstrand, *Sveriges historia, 1600-1721*, Stockholm, 2011; H. Gustafsson, *Nordens*

3. 新たな「国替え」論の焦点（1）— 異同共存する社会と「スコーネ化」—

グスタフソンによる「礫岩のような国家」論に触発されながら，かつての方法論的ナショナリズムでは確認することのできなかったスコーネの実態が明らかにされつつある．2000 年代以降，ルンド大学歴史学研究所を中心に進められてきた「国替え」研究の特徴的な論点のひとつは，スコーネ住民の姿をデンマーク国民」やスウェーデン国民のような属性に従って一体的に把握できるものではないという議論にあるだろう．

スコーネの「国替え」の頃に住民の一体性が希薄であった点は，近年の概説史上でも紹介されている事実である[10]．例えば，16 世紀の宗教改革の際にデンマーク君主政によって実行された領地交換により，貴族層は新たにスコーネに領地を得た者が多く，「スコーネ貴族」としての意識は薄かったとされている．「国替え」以降についても，住民を統括した社会階層はスウェーデンから派遣された者だけに限られず，都市や教区など，様々に異なる社会領域への帰属性を基準に行動した人々だった点が明らかにされつつある[11]．さらにスウェーデン君主政への統合プロセスが始まる 1681 年以前の訴訟の分析から，法廷におけるスコーネ住民の主張がその訴訟内容に応じて，時にはデンマーク時代に承認されていた法や権利を，時にはスウェーデン君主政の中核にあたるスウェーデン王国で承認されている法や権利を参照しながらなされていた点も明らかにされている[12]．これらの研究の成果に従えば，住民の帰属意識は国民性のような属性に基づくものではなく，自らの生活の利害関係に結びつくものだったと言える．

「国替え」の頃のスコーネが平等な法的権利や均一な文化的属性に従って結束が見られた社会ではなく，それぞれに異なる権利を主張した住民が異同共存する社会だった点が明らかにされつつある一方，様々な帰属意識をもった住民を結束させる軸として近年の研究が注目しているポイントは，スコーネ社会が新たにスウェーデン君主と結んだ関係性である．「国替え」以降のスコーネは，スウェーデン君主政を構成した他の地域政体と比較した場合，住民代表をスウェーデン王国議会に議員として派遣できた点に違いがある．スウェーデン君主政から見れば，

---

historia: en europeisk region under 1200 år, tredje upplagen, Lund, 2017.

[10] 例えば，S. Skansjö, *Skånes historia*, Lund, 1997.

[11] K. Bergman, “Konfliktlinjer och rumslig mångfald i det tidigmoderna Skåne”, F. Nilsson, H. Sanders och Y. Stubbergaard red., *Öresundsgränsen: Rörelser, möten och visioner i tid och rum*, Göteborg/ Stockholm, 2007; A. Olssen, “Inte bara undersåta, utan också borgare. De skånska stadsinvånarnas identitetsbruk 1658-1685”, Nilsson, Sanders och Stubbergaard red., *Öresundsgränsen.*

[12] Jens Chr. V. Johansen, “Skåneogretsvresenet1658-1684”, K. E. Frandsen och J. C. V. Johansen red., *Da Østdanmark blev Sydsverige: otte studier i dansk-svenske relationer i 1600-tallet*, Ebeltoft, 2003.

王国議会への上訴を認めることはデンマーク君主政との抗争の最前線に生きたスコーネ住民から支持を得るための方策だった．他方で，とりわけスコーネの住民代表となった貴族層から見れば，王国議会への上訴と立法プロセスに参画する機会を得たことは，デンマーク君主政で認められていた権利をスウェーデン王国の議会立法を通じて回復する方策として受け止められた.「国替え」以降の王国議会におけるスコーネ住民代表の活動に関する分析から,「国替え」以前には地域としての一体性が希薄だったスコーネが，王国議会で承認された法や権利を通じて一体性をもった地域へと変貌する「スコーネ化」の具体的な局面も明らかになりつつある[13].

「国替え」以降のスコーネの統治は，新たな君主，古くからの住民の双方が関与を主張したため，両者の交渉と妥協の連続を経てスコーネという地域が形成された．交渉と妥協の結果として実現された方策には，スウェーデン王国とは異なる基準で設定された関税制度や税制，軍制があり，スコーネ戦争後にスウェーデン王国の法制や行政制度が導入された後も一部は温存された．王国議会での立法という形式で承認されたそれらの措置は，スウェーデン君主政に包含された他の地域政体と比較した場合，スコーネ住民にのみ優遇された措置である．

1658 年のロスキレ条約からスウェーデン王国の法制・行政制度が導入された 1680 年代までの間, スコーネの住民代表は王国議会における交渉と立法により独自の利益を追及した結果，スコーネはスウェーデン君主政に包含されながらもスウェーデン王国に統合されることはなかった．しかしスコーネがスウェーデン王国へ統合されたとされる 1680 年代以降も，スコーネのみに認められた数々の措置が存在した．スコーネは今日に至るまでスウェーデン王国内にありながら独自の地域意識を育み，時に王国からの分離独立を主張する者が跋扈する地域として知られている．しかし近年の研究動向に従うならば，スコーネとしての一体性はこの地域に本源的に存在したものではなく,「国替え」以降の歴史的情況のなかで導き出されたスウェーデン君主政における権利の偏在から創造されたと見るべきである．

4. 新たな「国替え」論の焦点（2）— 教会から見た「スウェーデン化」批判 —

近年の研究が,「国替え」の頃のスコーネ住民の帰属意識は「国民としての物語」の前段に置かれるものとして描けない点を指摘した結果，方法論的ナショナリズムに従う「国替え」論が重視した「スウェーデン化」論はその根拠を失いつつあ

[13] F. Persson, “Riddare av det juridiska gränslandet. Den skån ska adeln på riksdagen 1664 ur ett identitetsperspektiv”, Frandsen och Johansen red., *Da Østdanmark blev Sydsverige*; 古谷大輔,「バルト海帝国の集塊と地域の変容—スコーネの編入とスコーネ貴族の戦略」, 古谷・近藤編,『礫岩のようなヨーロッパ』.

る．そして「スウェーデン化」論への再考は上述した政治的統合の観点からだけではなく，文化的統合の観点からも促されている．

文化的統合の観点に立ったスコーネの「スウェーデン化」論は，1680 年代以降のスウェーデン教会におけるスウェーデン語の導入を主たる根拠として語られてきた．「国替え」以降の新たな君主と住民の関係は王国議会を媒介に築かれただけではなく，民衆レベルではスウェーデン教会を媒介しながら築かれたものでもある．スコーネ戦争の危機的情況を受けてスウェーデン君主政へのスコーネ統合を画策したカール 11 世をはじめとする指導者層の戦略のなかで，とりわけスウェーデン教会は重要な役回りを期待されていた．方法論的ナショナリズムに立った議論では，スウェーデン教会の聖職者はスコーネ住民の日常生活に深く関与できたため，スウェーデン語の使用を通じてスコーネ住民をスウェーデン文化に統合する先兵の役割を果たしたと解釈されていた．近年の研究でも，スウェーデン語で記された聖書や教会法，教理問答，説教などを通じてスウェーデン教会がスコーネ住民に浸透していった点で見解の一致が見られるものの，スウェーデン語で語られた情報をスコーネ社会の末端に位置する教区レベルに浸透させるには長い時間を要した点に注目がされている[14]．

スコーネ住民が 16 世紀以来接していた福音主義ルター派の教義は，デンマーク教会も，スウェーデン教会も変わりはなかった．例えば，ルターによる『小教理問答集』は，デンマーク語訳とスウェーデン語訳の違いはあれ，堅信礼に至るまでの教会生活のなかで「国替え」以降も共有された内容だった．1680 年代以降，堅信礼はスウェーデン語で行われることが求められたが，スコーネ住民へスウェーデン語のみで福音主義ルター派の教説を伝えることは困難であるという認識がスウェーデン教会の聖職者たちの間に存在していた．つまり聖職者の観点に立てば，ルター派の教義を伝えることが最も重要な課題であり，その目的を達成するにはスウェーデン語の使用は最適な選択と見なされていなかった．スウェーデン語の使用だけではなく，デンマーク教会とは異なるスウェーデン教会に独特な祭礼形式に反対する聖職者の発言も近年の研究では確認されている．

スウェーデン教会が，スコーネ社会の末端においてスウェーデン君主政を日常的に意識させるインターフェースとして機能していたことは確かだろう．スウェーデン教会は，新たなスコーネの保護者としてデンマーク君主に代わるスウェーデン君主の存在を示す組織である．近年の研究はこの点に着目しつつ，上記のようなスウェーデン教会の聖職者の認識を踏まえたうえで，スウェーデン語は，スコー

[14] S. Alenäs, *Lojaliteten, prostarna, språket: Studier i den kyrkliga försvenskningen i Lundsstift under1680-talet*, Lund, 2003; H. Sanders, “Religiøst eller nationalt verdensbillede? Skåne efter overgangen til Sverige 1658”, H. Sanders red., *Mellem Gud og Djævelen: Religiøse og magiske verdensbilleder i Norden, 1500-1800*, København, 2001.

ネ社会の新たな保護者であるスウェーデン君主の存在を示す目的からデンマーク教会とスウェーデン教会を区別する指標として導入されたに過ぎないと議論されている．カール 11 世とその指導者層がスコーネの統合を意図したことは事実だが，近年のスコーネにおけるスウェーデン教会の研究を踏まえるならば，彼らにスウェーデン王国へのスコーネ住民の文化的統合の意図はなく，スウェーデン教会には新たな臣民にスウェーデン君主政の存在を示すことを任じていたと理解できる．スウェーデン語は国民のような文化的属性を示す指標ではなく，新たに保護下に加わった臣民に対して自らが属する君主政の存在を示す指標だったのである．

5. 新たな「国替え」論の焦点（3）—「鉄のカーテン」の不在 —

「国替え」以降のスコーネに生きた住民の姿がデンマーク国民やスウェーデン国民のような属性に基づかないとすれば，晩年のファブリシュースが冷戦のアナロジーとして描こうとしたウーレスンド海峡における「鉄のカーテン」の存在も疑わしい．実際，近年の研究では 1658 年の「国替え」以降もウーレスンド海峡を越えた人々の移動が続いた事例が明らかにされ，デンマークとスウェーデンという二つの君主政の間に引かれた境界が「壁」となったとの見解は否定されている．スコーネ戦争中には一時多くの住民がスコーネからデンマークへと避難したが，和平が実現されるとスコーネへ帰還する例が多々確認されているが，そこにファブリシュースが意図したような，自らと同じ文化的属性を求めてデンマークへ渡った住民の姿は見られない．

ファブリシュースによれば，スコーネ戦争時に 1 万人以上の住民がスウェーデン君主政の統治から逃亡したとされている[15]．この数値は詳細な検討を踏まえたものでなく，さらに和平が達成された後にスコーネへ帰還した住民の数も反映されていない．近年の研究では，スコーネに家族を残してひとりでウーレスンド海峡を越境した例などが確認され，スコーネ戦争後にスコーネへ帰還した人々の数を勘案すれば実際にスコーネからデンマークへ逃亡した住民の数は 4000 人にも満たなかったことが推定されている[16]．さらに「国替え」の頃のスコーネ住民の日常にとってウーレスンド海峡を渡る生活は一般的であり，人々は生活の糧を求めて頻繁に海峡を越えていた事実が確認されてもいる．「国替え」以降のスコーネに設定された新たな外国関税にもかかわらず，ブレーキンゲや北西スコーネのビャーレ半島からコペンハーゲンへと渡った行商人たちの事例から，「国替え」によって

---

[15] Fabricius, *op.cit.*, del. 4.

[16] J. Lerbom, “Flyttare, flyktningar, återvändare. Migration i gränsområdet kring Öresund under 1600-talets andra hälft”, Nilsson, Sanders och Stubbgaard red., *Öresundsgränser*.

も海峡を越える営みが絶えることがなかったことも明らかにされている[17].

確かに，デンマークに移住した貴族や司祭のなかには，スウェーデン君主政の統治に反発してデンマーク君主政の下で生きることを選択した者を確認することもできる．しかしながらスコーネがスウェーデン王国に統合された 1680 年代以降も 20 世紀に至るまで，スコーネ住民の生活の一部はウーレスンド海峡を越えた移動に支えられており，越境は日常的な行動だった．スウェーデン王国へスコーネが統合された後も，二つの君主政の間を往来した職人や行商人，デンマーク側に職を求めた農場労働者や使用人などの例は後を絶たず，そうした越境者の数は 19 世紀後半に頂点に達した．そうしたスコーネ住民の越境が困難になるのは，福祉国家としての経営の必要から国民国家としての同質化の圧力が強められた 20 世紀前半以降のことである[18].

ファブリシュースら，方法論的ナショナリズムに従った歴史学者の「国替え」に対する関心は国民国家としての同質化圧力の反照として導き出されたものだったろう．20 世紀の世界戦争の時代には，国民としての同質化への圧力が数多くの悲劇を生んだ．ファブリシュースやロセーンのような歴史学者は，ウーレスンド海峡に引かれた「鉄のカーテン」やスウェーデン国民国家への同質化を強制した「スウェーデン化」などの議論に仮託しながら，世界戦争の時代の悲劇を自らの問題として議論しようとしていた．しかしながら近年の研究は，スコーネに生きた人々は国民のような属性に従って同質化されていなかった事実を突き止め，「スウェーデン化」のような「民族浄化」にも似た議論の根拠が否定されている．近代以降のスコーネ独立主義者によって「スウェーデン化」が生んだ悲劇の英雄として語り継がれてきた「義兵」たちについても，その解釈は一変している[19].「義兵」たちは「遊撃兵 friskyttar」としてデンマーク軍に編成されたものの，彼らの内実は北東スコーネの森林地帯に潜んだ野盗たちだった．彼らの活動は主としてスコーネの農村への焼き討ちであり，スウェーデン軍は野盗たちが繰り返す不法行為への処罰として苛烈な処刑を行った．「義兵」たちの悲劇は，実際にはスコーネ住民からスウェーデン君主政に求められた保護要請に応じた結果だったのである．

---

[17] S. Fagerlund, *Handel och Vandel. Vardagslivets sociala struktur ur ett kvinnoperspektiv. Helsingborg ca 1680-1709*, Lund, 2002.

[18] H. Sanders, “Øresundsregionen i avisen. Danmark i Sydsvenska Dagbladet 1895-2005”, Nilsson, Sanders och Stubbergaard red., *Öresundsgränser.*

[19] 古谷,「バルト海帝国」；古谷大輔,「君主政の狭間から見る近世的主権国家：スコーネ住民と「正しき統治」」,『歴史学研究』, 976 号，2018 年.

おわりに

スコーネの「国替え」を巡る議論は，方法論的ナショナリズムがトリミングした「スウェーデン化」のような解釈によって長らく支配されてきた．とりわけデンマーク国民国家とスウェーデン国民国家の二項対立の図式は，スコーネ戦争のような情況を説明する際に説得的であり，そこで見出された「義兵」闘争のような例は，この対立軸を前提に語り継がれてきた近代の「神話」だった．

しかしながら，デンマークとスウェーデンの歴史学者たちが協働する近年の研究は，様々な帰属意識をもった住民が異同共存するスコーネの日常を明らかにすることで，方法論的ナショナリズムが現代的な課題に合致させるように想定した二項対立の論拠を奪い取った．利害関係が錯綜する日常に生きた住民の忠誠心は，常に一定のベクトルをもってデンマーク，スウェーデンのいずれかの君主に向かうものでなく，常に同質性を求めて国民国家のような統合を志向するものでもない．

ウーレスンド地域を舞台に協働関係を深める今日のデンマークとスウェーデンの歴史学界が見出した，多様な属性をもった住民が異同共存する社会の姿と，それらが情況に応じて結びつく「礫岩のような国家」のダイナミックな姿は，方法論的ナショナリズムが所与としたデンマークとスウェーデンの二項対立という「鉄のカーテン」を越えた先に見えた必然的な帰結だったと言えるだろう．

付　記

本稿は JSPS 科研費（課題番号 17H00934）の助成を受けた研究成果の一部である．

Bortom ”järnridån”
– Aktuell forskningshistoria i Danmark och Sverige om ”Skånelandskapens övergång” –

Daisuke FURUYA

Sammanfattning

Under de senaste åren har japanska historiker blivit mer och mer intresserade av begreppet ”konglomeratstat” som Harald Gustafsson (1953-) förespråkar. Med detta avser han hur man anpassar den politiska ordningens verklighet till det tidiga moderna Europa. Han bildade sin uppfattning om ”konglomeratstaten” efter att ha omprövat Skånelandskapens övergång under 1600-talet. Målet för uppsatsen är att introducera aktuell forskningshistoria om ”Skånelandskapens övergång” för att japanska historiker ska förstå konglomeratstaten på ett korrektare sätt.

Skånelandskapens övergång har diskuterats utifrån den metodologiska nationalismen i både Danmark och Sverige under 1900-talet. Till exempel har den politiska och kulturella integrationen av Skåne i Sverige beskrivits som inramad av de danska och svenska nationalstaterna, där Öresund har utgjort en ”järnridå”. Knud Fabricius (1875–1967) hävdade detta ur ett nationalistiskt perspektiv. Gustafsson och hans kollegor kritiserar tolkningen av Skånelandskapens övergång genom att avslöja verkligheten i 1600-talets skånska samhälle, där invånare med olika identiteter existerade tillsammans.

I den här uppsatsen fokuserar jag på tre punkter för tendenser inom dagens forskning om Skånelandskapens övergång. Gemensamt för dessa punkter är kritik mot forskning som baserats på ett nationalistiskt synsätt. Den första punkten är ”förskånskning”, det vill säga processen att inrätta en regional enhet genom förhandlingar mellan monarken och olika invånare. Den andra punkten är kritik mot hur Svenska kyrkan ”försvenskade” skåningarna enligt tolkningen om "försvenskning". Den tredje punkten är att det inte fanns någon ”järnridå” mellan Danmark och Sverige.